

# 成人看護学援助論Ⅱ（慢性期）の授業展開

## — 看護学生の死生観について —

北端恵子<sup>1)</sup> 岩崎淳子<sup>1)</sup> 林 久美子<sup>1)</sup> 高橋直美<sup>1)</sup>

### I. はじめに

文部科学省は、2011年「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」の中で、「終末期にある対象を援助する能力」を挙げている。それは、人間の生理的機能が不可逆的な状態に陥る疾病や病態の終末像の全人的な理解、人の死と死に逝く人を愛する人の心の理解、看取りをする家族への援助方法を説明できる能力である。また、終末期の全人的苦痛を軽減・緩和し、死にゆく人の意思を支え、その人らしくあることを援助する方法を説明できる能力である（文部科学省 2011）。また、2017年、文部科学省から看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学習目標—の中でも、「人生の最終段階にある人々に対する看護実践」のなかで、人生の最終段階にある人の価値観や人生観、死生観を引き出し、終末期の過ごし方を考える援助関係の築き方について説明できる。ことをねらいとして挙げている（文部科学省 2017）。つまり、看護基礎教育での知識・技術の獲得に加え、死生観や援助にかかわる態度の形成が求められている。

今回、成人看護学援助論Ⅱ（慢性期）で、終末期ケアの講義で学生の死生観に関するレポートを書くことで、今まで人の生き死について考えたことがなかった多くの学生が、死に対する考えや生に対する考えの大切さを考えることに繋がったことについて報告する。

### II. 成人看護学援助論Ⅱ（慢性期）の目的と概要および到達目標

#### 1. 講義目的

慢性的な健康障害をもつ成人とその家族に対する看護の役割と実践を理解する。

#### 2. 科目概要

慢性的な健康障害をもつ成人の心理社会的な特徴や病気療養しながら生活するうえでの支援システム、家族のニーズと支援のあり方、看護について学ぶ。

#### 3. 到達目標

- 1) 慢性疾患の特徴を理解し、慢性的な健康障害をもつ成人の心理社会的な特徴が述べられる。
- 2) 慢性疾患を持ちながら生活する成人とその家族のニーズと支援システムが理解できる。
- 3) 慢性的な経過をたどる成人とその家族に必要な支援のあり方、具体的な看護が述べられる。
- 4) がん看護、終末期における看護の役割が述べられる。

### III. 実施内容

1. シラバスとその概要 成人看護学援助論Ⅱ（慢性期）の開講は3年生後期（9月16日～12月19日）に実施した。学生数は77名、担当教員は非常勤講師を含め4名であった。シラバスは表1の通りである。

---

1) 朝日大学保健医療学部看護学科（成人看護学）

## 2. 死生観レポートの提出方法

第12回目から第15回目の講義の担当教員が、第12回目の講義終了後死生観レポートを提出する課題を学生に出した。提出期限は14回目の講義時までとした。レポートを作成するにあたり、最低1つは文献を読むこととし、文献は絵本を用いてもかまわないことを説明した。学生に参考文献として以下(表2)を提示した。提示した文献以外のものを使用しても良いことを説明した。

「死生観」について、生と死についての考え方、生き方、死に方についての考え方(新村出, 2008)と定義し、学生に説明した。

また、学生には学生の個人情報載らず、評価に支障がないことを説明し、次年度以降の教材として用いることや、教育内容の紹介時用いることを紙面で許可を得た。

表1 成人看護学援助論Ⅱ(慢性期)シラバス

回数	内 容
1	授業ガイダンス 慢性期看護の考え方
2	慢性期にある人への看護援助
3	栄養摂取・代謝機能障害の慢性期になる患者の看護
4	栄養摂取・消化機能障害の慢性期にある患者の看護
5	免疫系機能障害の慢性期にある患者の看護
6	呼吸器系障害の慢性期にある患者の看護
7	運動器機能障害の慢性期にある患者の看護
8	脳・神経系障害の慢性期にある患者の看護
9	循環器系障害の慢性期にある患者の看護
10	造血器機能障害の慢性期にある患者の看護
11	生体防御機能障害の慢性期にある患者の看護
12	排泄機能障害のある患者の看護
13	新たな治療を受ける患者の看護
14	がん看護: 患者の理解, 社会政策, 就労支援
15	緩和・終末期看護, スピリチュアルケアと看護

表2 提示文献

文 献	内 容 (あらすじ)	提 示 理 由
100万回生きたねこ	死んでは生き返るを100万回繰り返したねこがいた。飼い主はねこが死ぬと悲しんだが、ねこは悲しんだことがなかった。ある時、ねこは誰のねこでもなく野良ねこであり、自分に興味を持たないめすねこに会い、家族を持つようになる。やがて年老い、めすねこが死んだ後、悲しむ日を送りやがて死を迎え生き返ることはなかった。	愛されることはあっても、愛すことを知らないねこが100万回生き返り、愛することを知って死ぬことができた。死を迎えることの本当の意味を考えさせる点。 他大学でも教材として使用していた。
葉っぱのフレディ	「死」について考える作品です。フレディとダニエルの会話を通じて、生きるとはどういうことか、死とはなにかを考えさせられます。「死ぬということも 変わる一つのなのだよ」というダニエルの言葉に、著者の哲学が込められているようです。	自分の力で「考える」ことをはじめた日本の子どもと、子どもの心をもった大人たちに贈ります。わたしたちはどこから来て、どこへ行くのだろうか。生きるとはどういうことだろうか。死とは何だろうか。人は生きていくかぎりこうした問いを問いつづける点。 看護学校で教材として使用されていた。
ずーっとずーっとだいきだよ	犬と同時に成長したぼくは、ある朝、犬が死んでしまう。ほかの家族は悲しんだが、ぼくはそうではなかった。それは、毎日、「ずーっとずーっとだいきだよ」と言い続けていたから。	命あるものは、いずれ亡くなる。しかし、その時がいつ来ようとも後悔が残らないように、それまでの人大切に考えさせる点。 高齢者介護施設で働いている方々に教材として使用されていた。
わすれられないおくりもの	賢くて、いつもみんなに頼りにされているアナグマだが、冬が来る前に「長いトンネルのむこうに行くよさようなら アナグマより」という手紙を残して死んでしまった。悲しみにくれる森の動物たちは、それぞれがアナグマとの思い出を語り合ううちに、彼が宝物となるような知恵や工夫を残してくれたことに気付いていく。そして、春が来る頃には、アナグマのことは楽しい思い出へと変わっていった。	書評で、『たかが子ども向けの絵本とあなどるなかれ。子どもたちに「死」について考えるチャンスを与え、すでに「死」を理解する大人にも静かで深い感動をもたらす。親しい人とお別れを経験した方に、心を込めて贈りたくなる。』と書かれていた点。 高齢者介護で働いている方々に教材として使用されていた。

### 3. 学生の考える死生観

77人中、承諾を得た70人のレポートについて、自分が考える死生観について書かれている文章内容を読み取り、文章化した。

文章化されている内容について、整理した。

学生はレポートを作成するにあたって、参考文献以外の絵本や書籍、論文、ホームページなども使用していた。

#### 1) 「生」について

「後悔しない生き方をしたい」という内容が多かった。後悔しないとは、今日が最後かもしれないと思い1日1日の日々の生活を大切にすることや、本当にやりたいこと、大切な人、家族、時間を大事に有意義な人生を送ること、自ら選択し自分らしく生きること、正直な気持ちを大切な人に伝えることなどであった。

また、「いつでもできることはこの世に一つもない」「時間には限りがある」「人と出会い支えあっていくこと」「今を大切にしようと思う」「自分だけで生きているわけではないことがわかった」などの時間や人との関係性に関する内容があった。

#### 2) 「死」について

「死がゴール」「魂は生き続ける」「死の向こうにあるのは無」「輪廻転生という考え方はなく、死んでしまったら人生の終わり」など死への考えがあった。

死ぬときまでに思うこととして、「誰かの記憶や心の中、思い出に残ること」「人生という修行を終えてよく頑張った証拠である」「感謝の気持ちを伝えていきたい」などの内容であった。

自分が死を迎える状況として、「負担をかけず死にたい」「孤独死は避けたい」「苦痛なく最後を迎えたい」「延命治療はあまりせずに死にたい」「リビングウィルという選択肢をとるのはよいのではないか」などの内容であった。

他者の死に対して、「死ぬことがどれだけの人に悲しみを与えるかを感じた」「亡くなった人（動物）は自分の心の中で生き続ける」という内容が多かった。

#### 3) 死生観を持つことや死生観について考えることについて

「死生観を持つことで死と向き合うことができた」「自分だけで来ていることではないとわかった」「死生観を持つことで死への恐怖や不安が軽減され、死への準備ができる」「目標や目的などの『生きがい』を持つことが必要であるとわかった」「人生を充実させ、前向きに生きていくために必要である」という内容があった。

## IV. 考 察

死生観レポートの課題の実施で、学生は日頃考えることがない死生観について考えることにより、人が生きるとはどういうことか、死を迎えるということはどういうことなのかを考える機会となった。また、学生の今後の生きる過程での考え方や生きていく状況や、時間や人との関係性を大切にすること、後悔しない生き方について考えることに繋がった。また、死への思いを文章化することで死に対する自分の考え方や自分の死についてや他者が亡くなるということについて考えることに繋がった。学生の中には祖父母の死の経験やペットの死の経験から述べられているものもあった。しかし、近親者等の看取りの経験もない学生が多く、実習においても、終末期の患者の担当になることは困難な状況である。そのような中、文献を用いて死生観を考えることは、学生の死に向き合う態度や、今後の死生観の構築にも影響を及ぼすと考える。

死生観教育は終末期看護への理解にも影響すると言われている(石川ら 2015)。青年期にある学生にとって、死は自分とは遠い存在であり、実感できない状況にあるといえる。今回、レポートでは自分の生や死に関する内容が多かった。その中でも、「患者さんの最後を看取ることが多い職であるが、最後を患者さんら

しく迎えられる支援することができる職であるとも考える」という学生もいた。自分の死生観を持つことで他者に対する「生」や「死」に対する思いや考えも育まれてくると考える。

今後は、自分の「死」や「生」に対することだけでなく、他者の「死」や「生」に対する死生観育成につながるような教材を「死別体験」を語る内容で、より身近に感じることができるようしていきたい。

## V. 終わりに

成人看護学援助論Ⅱ(慢性期)で、死生観に関するレポート課題を行い死生観について考える機会とした。しかし、どの領域実習でも、人の生と死について考えることは必要である。今後、どの領域でも患者を通して自己の死生観育成につなげることが望ましいと考える。そのために、絶えず学生に意識できるように関わっていくことが重要である。

## 文 献

- ハンス・ウェルヘルム絵と文, 久山太市訳 (1988): ずーっとずっとだいすきだよ, 評論社, 東京.
- 平川仁尚, 葛谷雅文, 加藤利章, 植村和正 (2009): 高齢者ケアに関わる職員を対象とした絵本を用いた死の教育の効果, ホスピスケアと在宅ケア, 17 (1), 14-16.
- 石川美智, 山本真弓 (2015): 身近な人との死別体験を教材とした死生観教育展開後の学生の思い. ホスピスケアと在宅ケア, 23 (3), 355.
- 文部科学省 (2011): 大学における看護系人材の在り方に関する検討会最終報告.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf) (2017年12月25日)
- 文部科学省 (2017): 看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学習目標—.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf). (2017年12月25日)
- レオ・バスカーリア作, みらい なな訳, 島田光雄画 (1998): 葉っぱのフレディ—いのちの旅, 童話屋, 東京.
- 佐野洋子作・絵 (1977): 100万回生きたねこ, 講談社, 東京.
- 新村 出編 (2008): 広辞苑第6版, 1232, 岩波書店, 東京.
- スーザン・バーレイ作絵, 小川仁央訳 (1986): わすれられないおくりもの, 評論社, 東京.
- 田中とも子 (2001): 童話「葉っぱのフレディ」を用いた高齢者像「老い」の理解を深める, 日本看護学教育学会学術集会講演集, 11, 139.
- 種市ひろみ, 熊倉みつ子, 森田圭子 (2016): 在宅看取りを体験した介護者の講演聴講による看護学生への影響について—死生観, ターミナルケアに対する態度に焦点を当てて—, 日本地域看護学会誌, 19 (2), 40-47.
- 山手美和 (2014): 緩和ケア実習における看護学生の学び—死生観の変化と患者との関係性構築—, 国立看護大学校研究紀要, 13 (1), 45-54.